行田市陣場遺跡の調査

栗原文藏・駒宮史朗

Ⅰはじめに

行田市埼玉(さきたま)には、関東地方有数の大前方後円墳が集中する埼玉古墳群が所在する。埼玉古墳群は昭和13年に国の指定を受け、また昭和43年からは風土記の丘構想に基づき、古墳群の整備が計画的に進められており、現在も進行中である。

この史跡整備に伴い古墳の発掘調査も実施され、しだいに古墳群の実態も解明されつつある。とりわけ稲荷山古墳出土の金錯銘鉄剣の銘文は、東国の古墳文化のみならず、日本の古代国家成立の過程解明に大きなはずみをつけた。

これら新資料の発見によって、埼玉古墳群の東国の古墳時代に占める重要性が、一段と認識されるようになり、古墳文化の解明はさまざまな角度からアプローチされている。

土器の面からは、地域圏間の交流という視点から古墳社会の構造を試しみるなど[註1]、埼玉古墳群をとりまく研究も活発の兆しをみせている。

しかしながら、埼玉古墳群周辺には、これまで古墳群と同時期の集落遺跡の調査例は少なく、わずかに小針遺跡[註2]や神明遺跡[註3]などが知られているいすぎない。この様な情況下、陣場遺跡は古墳群に隣接して、しかも良好な土器のセットが出土している。さらに方形周溝墓の検出など、資料の空白を埋める貴重な遺跡としてその意義は高いものである。

陣場遺跡は、たまたま畑地の土取り工事中に発見されたもので、発見当時、工事はなかり進行しており、遺跡はすでに大きく削平され、断面には住居跡様の黒い落込が確認された。

調査は遺跡発見の報告を受けた栗原を中心に、昭和43年３月学生の応援を得、日曜、祭日を利用して急拠、応急的な調査を実施した。このため図面等の不備もあろうが、調査以来20年余を経過し、これまで断片的な内容しか発表されていない遺跡の実態と出土資料の重要性に鑑み[註4]、この機会に報告するものである。

当時調査に参加協力していただいた学生諸君、並びにその後整理等にたずさわった関係者諸氏に改めて御礼申し上げるしだいです。

遺跡の立地

陣場遺跡は埼玉古墳群の南方、行田市渡柳に位置し、最も近い中の山古墳から約300mほど西に位置している。現在古墳群の所在する埼玉周辺は、あまり地形の高低差はみられないが、大部分の遺跡はローム台地上に立地している。このローム台地は北足立台地と呼ばれ、大宮周辺から北に伸びて、行田付近が末端にあたる。

このあたりは、ちょうど荒川と利根川に挟まれた地域で、このため河川の氾濫や、関東造盆運動による地盤の沈降が見られ、これらの自然的な作用の影響を受け、地形的変化に乏しいものとなった。

これまでの埼玉古墳群の調査による知見でも、古墳群周辺には小さな谷がいく筋も入り込んでいるのが確認され、また万葉集に詠まれた小埼沼の存在など、古墳が築造された当時は変化に富んだ地形であったことが検証されている。

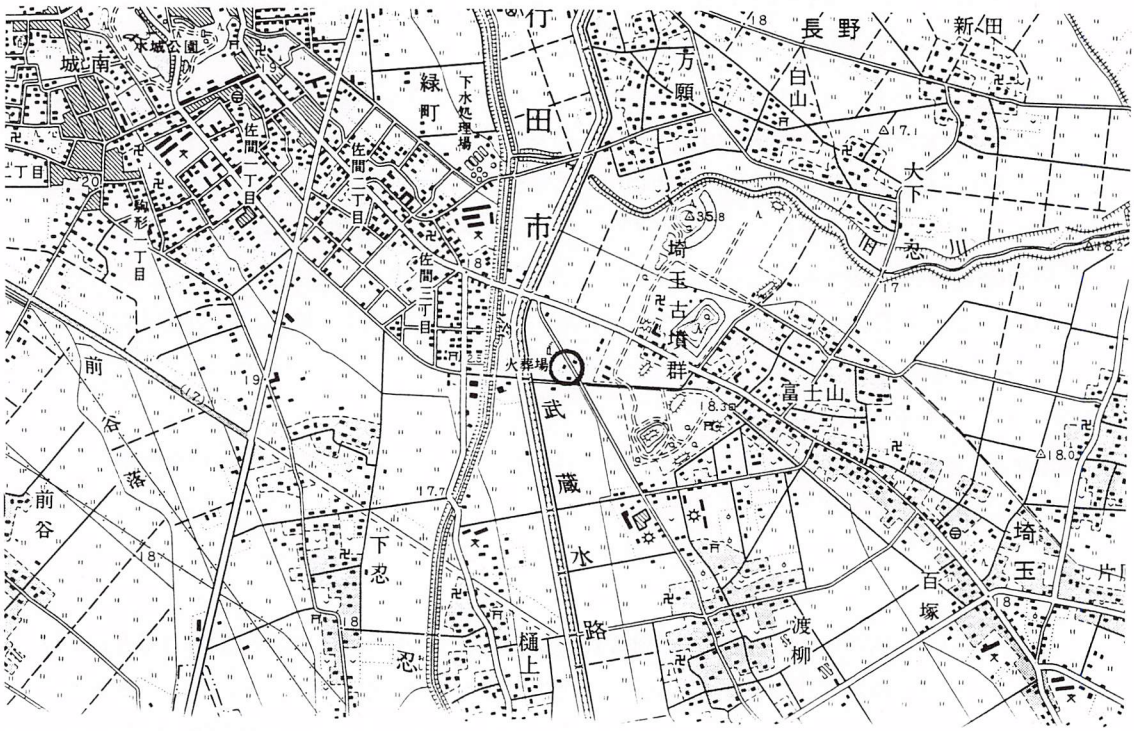
陣場遺跡の北方には、かつて小円墳群が分布していたが、現在は消滅してしまった[註5]。陣場遺跡の名称は、天正18年（1590）石田三成が忍城水攻めの際、この地に陣を張ったのに拠ると伝えられている。

遺跡の概観

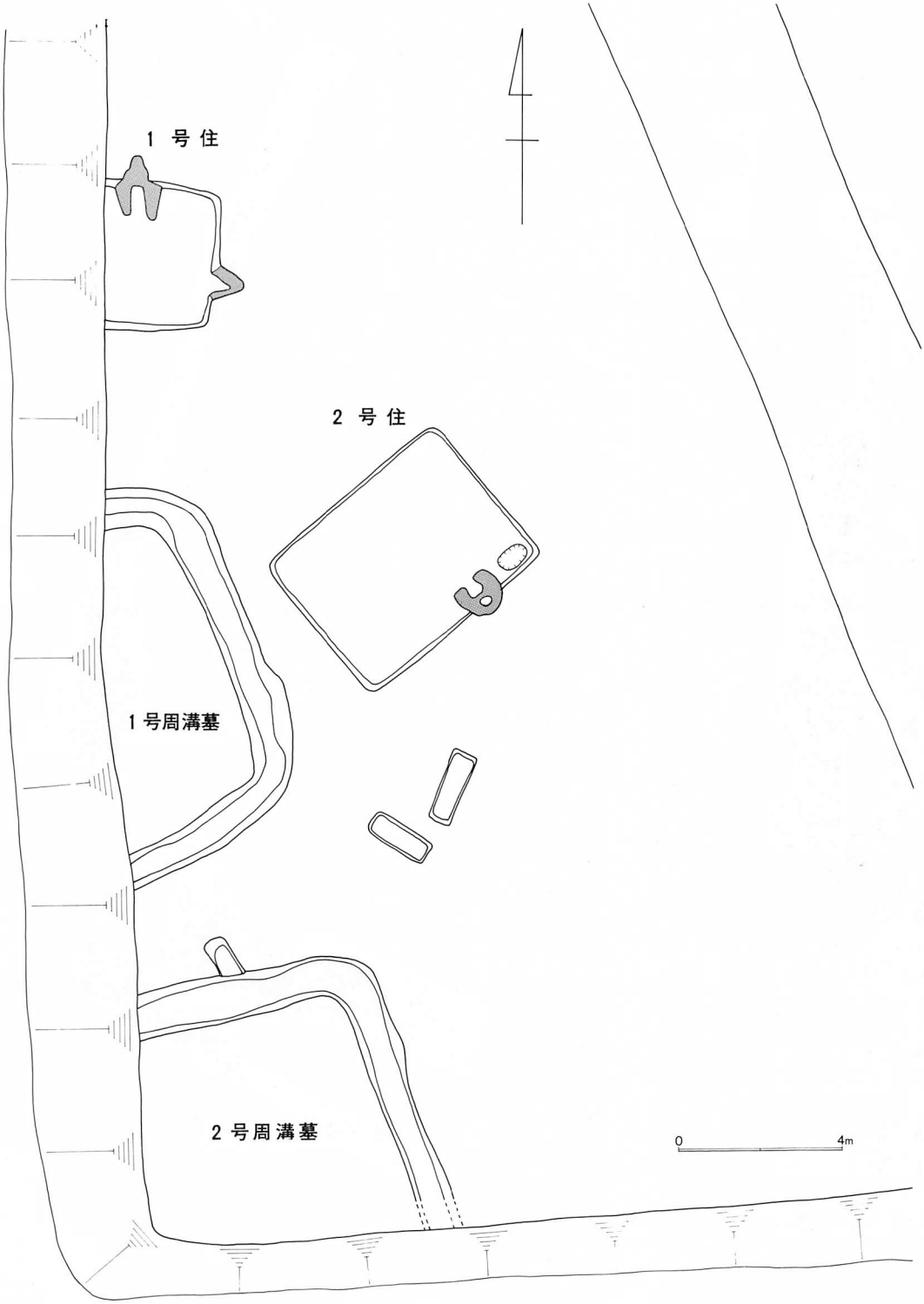
遺跡の所在した場所は、付近の水田より約２ｍ程の比高差がある。この微高地はさらに西へ伸びゆるやかな傾斜で続いていたが、西側と北側は大きく土取の跡が崖面を形成し、かつてこの隣接地からも土器が発見されているが[註6]、その崖面となったところに、遺構の落込が確認され、遺跡発見の発端となった。

調査の結果、検出された遺構は方形周溝墓２基、古墳時代住居跡１軒、歴史時代住居跡１軒、時期不明の土壙３基である。

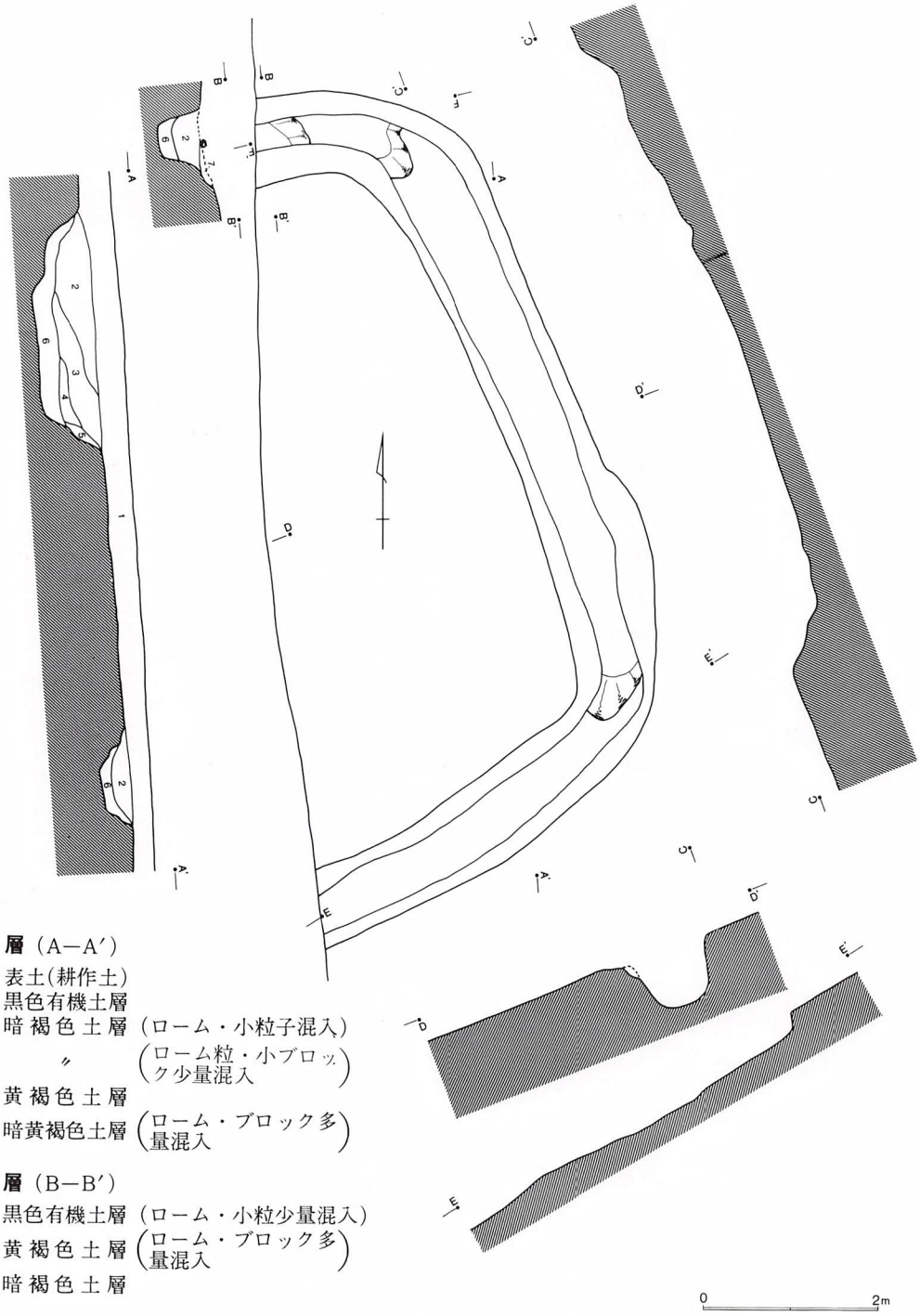
調査面積は26ｍ×12ｍの約300ｍの小範囲であるが、これらの遺構の他に、縄文土器片や、埴輪片、中・近世の土器片も採取されており、これらに関連する遺構が付近に存在するものと思われる。



第１図　陣場遺跡位置図



第2図　陣場遺跡実測図



土　層（A—A′）

1　表土(耕作土)
2　黒色有機土層
3　暗褐色土層（ローム・小粒子混入）
4　〃（ローム粒・小ブロック少量混入）
5　黄褐色土層
6　暗黄褐色土層（ローム・ブロック多量混入）

土　層（B—B′）

2　黒色有機土層（ローム・小粒少量混入）
6　黄褐色土層（ローム・ブロック多量混入）
7　暗褐色土層

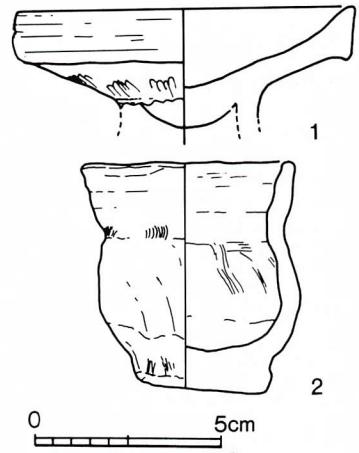
第3図　第1号方形周溝墓実測図

遺構と遺物

第１号方形周溝墓

周溝墓の西側半分を土取りによって削られていた。遺存状態の良好であった東周溝の規模は、長さ8.4mを測る。南と北のコーナー部分に丸みを有す隅丸方形となる。南と北の周溝はふくらみがみられることから、大きさは推定9.２m前後となる。溝は中心付近で深くなり、東側周溝でローム面から深さ70cmで、コーナーでやや幅広となる。 周溝内からは、北溝の土層断面Ｄ－Ｄ′にかかって45cm程底より浮いて器台が出土している。この土器は周溝墓の盛土上におかれたものが流れ込んだものと思われる。

また北溝の第６層上部から手づくねの小型壷が出土した。



第４図　１号周溝墓出土土器

周溝内に堆積する土は、単純な層序で周溝の規模から盛土の高さは差程高いものと思えない。埋葬施設は不明であった。主軸はＮ－23°－Ｗである。

１号周溝墓出土土器（第４図）　１は小型の器台で、台部を欠く。口径9cm残存高３cm。口縁は垂直気味に立上がり、厚みのある端部となっている。皿部はゆるやかで浅く、台部との接合部分できれいに分離している。皿底部の中心は丸味をもって突出し、台部に嵌入された痕が残る。

内外面とも丁寧なナデ付調整が行われ、胎土は精選され器面は滑らかで焼成は良好である。

２はてづくね壷で口縁の一部を欠くが、ほぼ完形である。口縁部径5.5cm、高さ６cm、底径2.5cmを測る。器面には成形時の押圧痕が残り、口縁には横ナデ整形が行われ全体に丁寧に仕上げられている。体部は細かなハケで調整され、特に底部付近はハケにより強い削り込みで大きくえぐられている。全体の焼成は良く、体部も入念なナデ付で滑らかである。色調は橙褐色で焼成良好である。

第２号周溝墓（第５図）

１号墓の南に位置している。東と南の溝を土取りによって削られているため、全体の形は不明である。ほぼ直線的な溝で構成され、コーナー部で浅くブリッジ状を呈す。ローム面の掘り込み幅は北溝1.2m、深さ50cm東溝で幅90cm、深さ50cmとなり、中央部が最も深くなっている。北壁は土壙によって切られている。

溝内に堆積する土層は単純な４層からなり、出土遺物はなく、埋葬施設も検出されなかった。主軸はＮ－14°－Ｗをしめす。

第１号住居跡（第６図）

西壁が削られている。北壁と東壁にカマドが設置されているが、東壁カマドは取り壊され、新しく北に作り替えたものと思われる。

住居の規模は、南北3.65m、東西3.0m程が残存していた。各辺はわずかにふくらみがみられるがほぼ正方形プランを呈す住居となろう。ローム面からの掘り込みは深さ50cmで、床面は平坦である。床面には硬くなった粘土が堆積し、さらにカマド西側付近一帯は粘土の上に焼土が広がっていた。

柱穴、壁溝等の施設は確認されなかった。

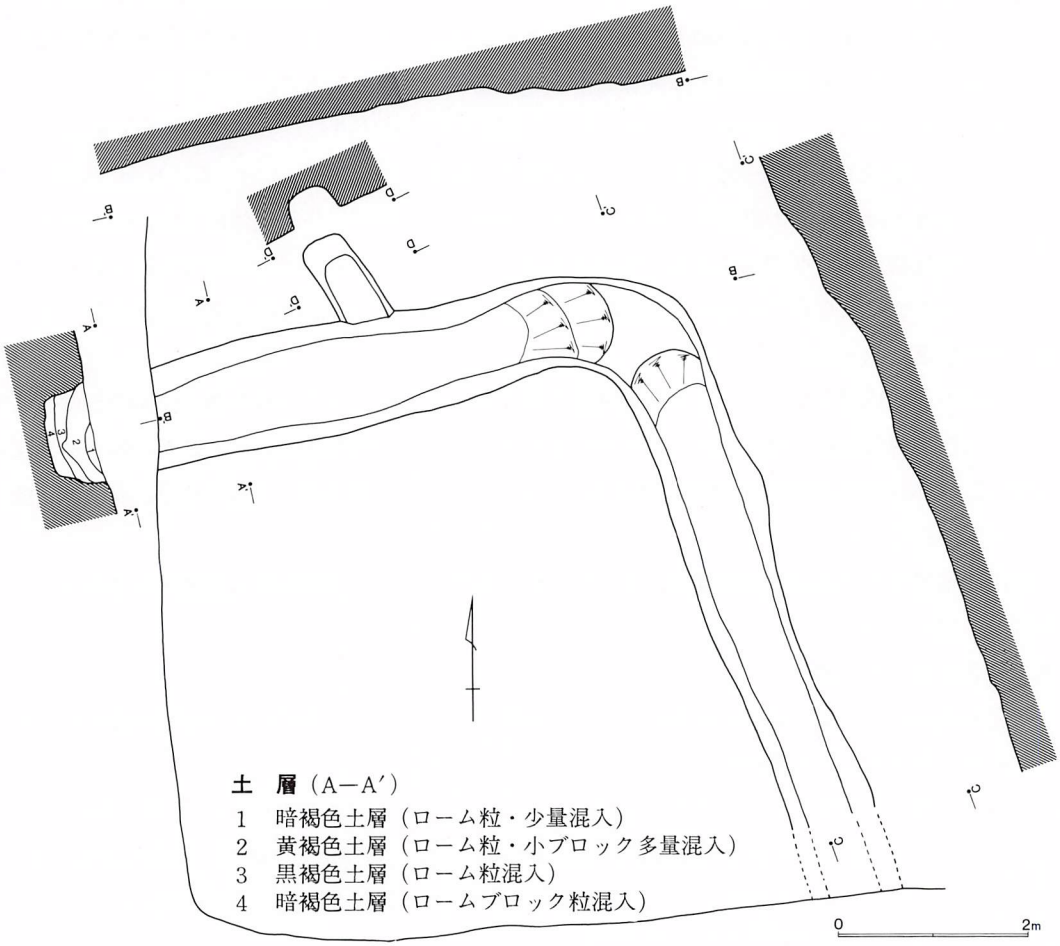
カマドは粘土を芯として用い、煙道は外へ60cm程のびている。主軸はN－4°－Eとなる。

出土遺物は南壁近くから砥石、東カマド付近から須恵器の杯が出土している。このほかにカマド及び覆土中から土師器甕が出土している。

1号住居跡出土遺物（第7図）　須恵器はすべて胎土中に白色針状物質を含み、底部の切り離しは回転糸切の無調整である。

須恵器杯蓋(1)　口径16cm　破片からの復元である。口縁端部を折り返し、断面三角となる。焼成は酸化炎焼成で、色調は橙褐色を呈す。2は口径12.5cm、底径7cm、器高3.8cm、胎土・焼成は良好。

3は口径12cm、底径6.5cm、器高3.1cm、焼成は堅緻である。4は底部を欠く、口径12.8cm、底径推定6.8cm、器高4cm、焼成は半還元炎焼成となり色調は明褐色である。5は口径12.5cm、底径7cm、器高3.7cm、水挽の凹凸が残る。口縁は単純に直接的に立上る。6は口径12cm、底径6cm、器高4.3cm。焼成は重ね焼きによる熱のまわりの影響によって、口縁部付近は灰褐色となり、体部下半は茶褐色の土師質に焼きあがっている。7は底部を欠く、口径12cm、厚い器内で口縁はわずかに内湾しながら開く。焼成は良好である。8は口径13.5cm、底径5.7cm、器高4cm、底部は厚くゆるやかに内湾した口縁が大きく開く。焼成は悪く器面が荒れている。明灰色を呈す。



第5図　第2号方形周溝墓実測図

9は口縁を欠く。底径は7.5cm、全体は薄手のつくりで、焼成はあまい。

甕形土器（10～14）

10は口径22.8cm、口縁はコの字状に外反し、ヨコナデ整形されている。色調は明褐色を呈す。破片からの復原である。

11は口径15.5cm、口縁は内湾気味に立上がり、端部で外反し、小さくつまみ出されている。横ナデ調整が丁寧におこなわれており、肩部以下は横位のヘラケズリが行われている。色調は茶褐色で、胎土は精選されいてる。

12は口径11.2cm、小型の甕で小破片からの復元である。口縁部は垂直に立上り、端部は内湾しながらわずかに開く。口縁の内面にゆるやかな稜を作る。器面が摩滅している。色調は明褐色で焼成は良好である。

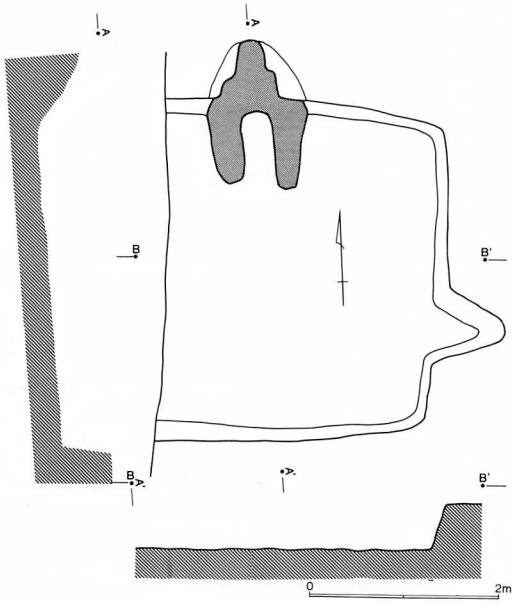
13は台付は甕の台部である。台径9.8cm、台部は大きくハの字に開き安定した作りである。色調は暗褐色、胎土は細かい。

14は端部を欠く。内外面にロクロ水挽痕が横走している。色調は茶褐色で焼成は良好で胎土は細かい。

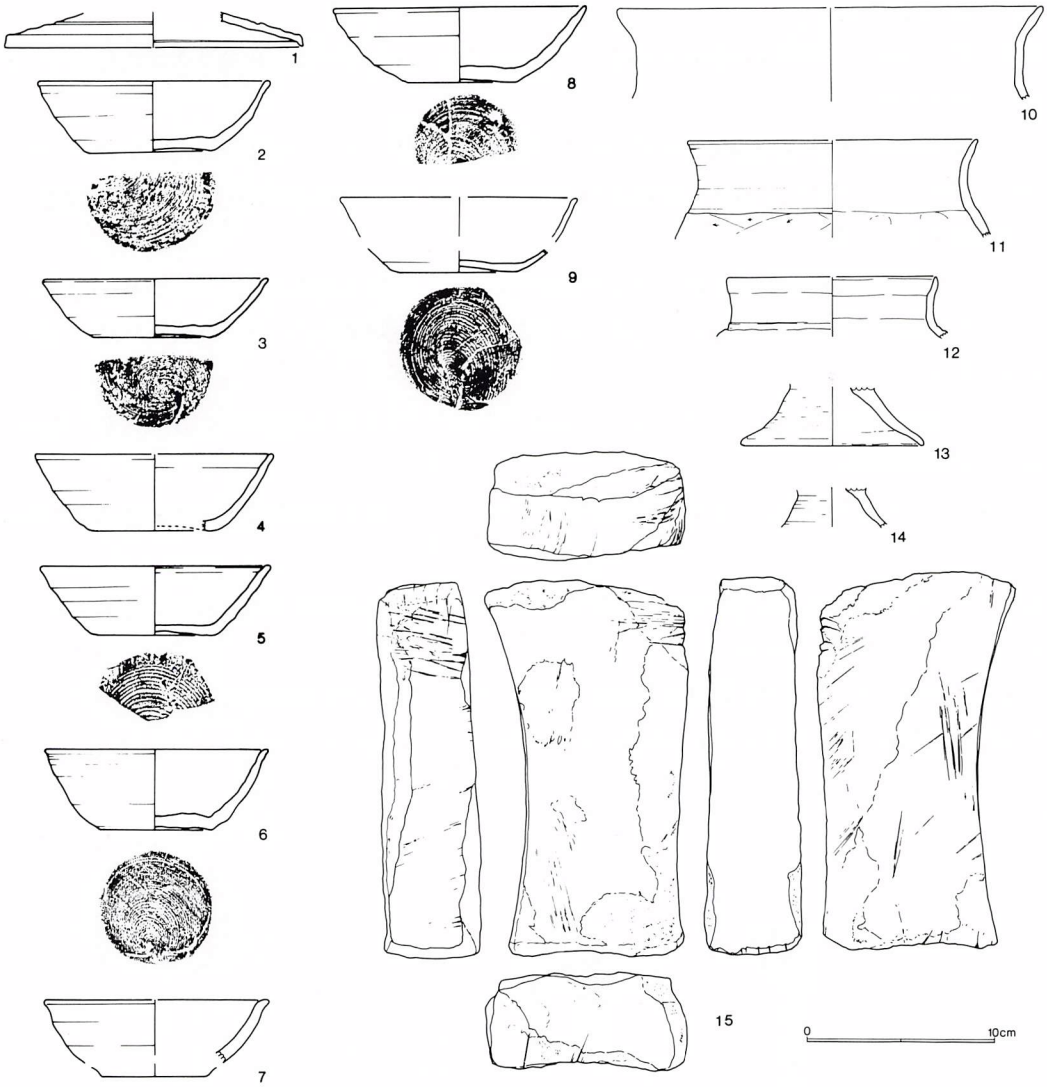
砥石（15）直方体に形どりした石を丹念に使い込んでいる。使用面は主に側面を使用し大きくすり減って、滑らかになっている。

上面や木口面には、するどい線刻状の擦痕が認められ、部分的に自然面が残っている。

長さ21cm、幅10.7cm、厚さ5.2cm、重量1.6kgを測る。石質は凝灰石である。



第6図　第1号住居跡実測図



第７図　第１号住居跡出土遺物実測図

第２号住居跡（第８図）

端正な長方形プランを呈する住居跡である。長辺5.38cm、短辺4.25cmを測る。ロームの確認面からの掘り込みは30cmで、床面は平に硬くしまっている。柱穴、壁溝等の施設は検出されなかった。

カマドは南側長辺の壁に、やや東に偏して設置されている。袖は粘土を用いて成形されているが、上部は崩壊しており、遺存状態はあまり良くない。煙道が壁外へぬけている。

カマド左のコーナー部に、小判形をした80×40cm、深さ5cmの皿状に掘られた貯蔵穴様の浅いピットが掘られている。

遺物はカマド付近に集中して、土師器杯、甕が出土している。

第２号住居跡出土器（第９図）

土師器杯（１～９）

1は口径13.8cm、器高4.5cm、厚みのある浅い体部から、中程でややくびれて内湾しながら立上がる口縁がつく。口縁及び内面は横ナデが施され、底部外面はヘラケズリ整形が行われている。

内面と口縁部は赤彩がされ、胎土中には石英の砂粒が含まれている。

２は口径13.2cm、器高5.5cm扁平な底部から外反する大きな口縁が立上がる。口縁部は横ナデ調整、底部外面はヘラケズリが施され、内外面は赤彩されている。胎土中には石英質の砂粒が含まれ、焼成は良好である。

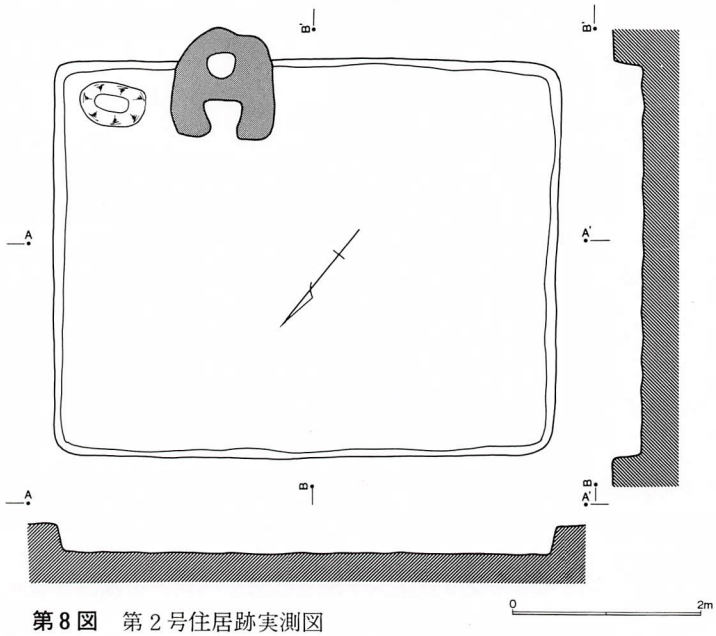
３は大形の杯である。口径16.5cm、器高6.2cm、体部と口縁部との境が大きく突出し、大きく外反した口縁が立上がり、さらに端部が小さく開く。内外面とも丁寧な作り方で、底部は入念なヘラケズリが行われている。

４は口径12.3cm、器高５cm、丸味をもった体部から中程が括れた短い口縁が外反しながら立上がる。胎土中には砂粒が含まれているが、器面は丁寧な仕上で滑らかである。内面中心部は黒色処理をされ、口縁の内外面は赤彩が施され、焼成は良好である。

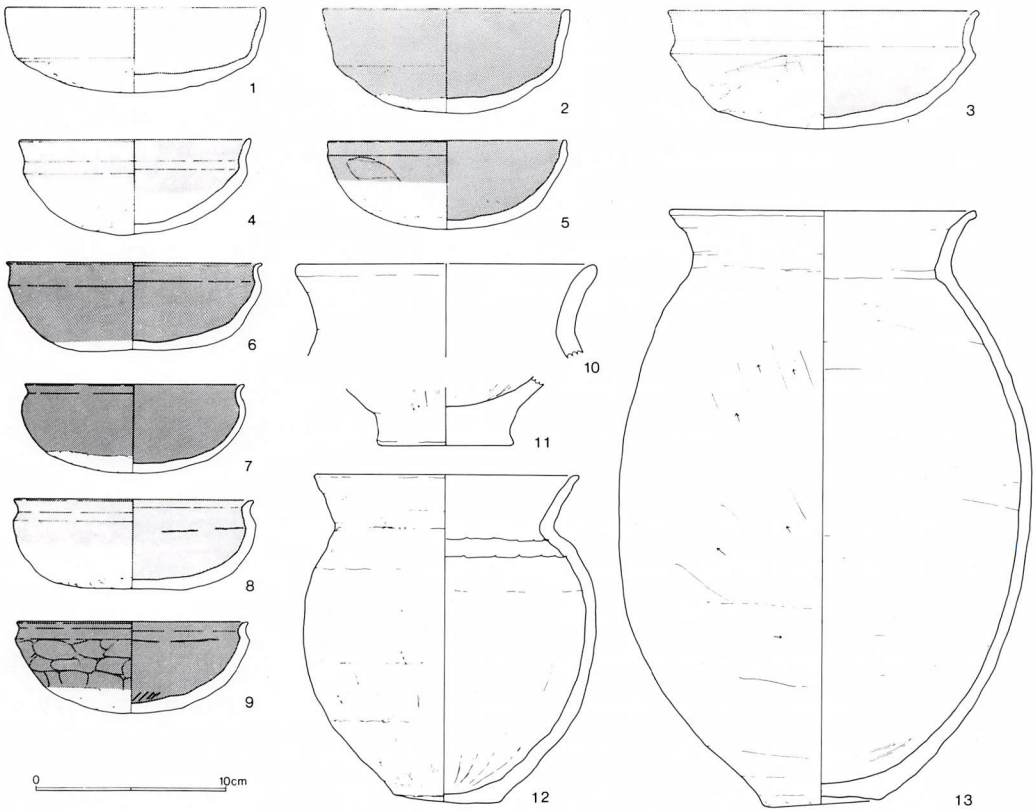
５は口径12.7cm、器高4.7cm扁平な底部から丸味をもった体部に移行し、短い口縁が小さく括れながら立上がる。体部はヘラケズリの痕が残り、内面は丁寧にナデ付けられている。胎土中に細かな砂粒を含み、内面及び外面は口縁から体部上部にかけて赤彩が施されている。

６は口径13.6cm、器高4.7cm、平底で深味のある安定した体部には、短い内湾した口縁がつき口唇は薄く外方へ小さくつまみ出されている。

内面はナデ付けられ、外面はヘラケズリ後ナデへの調整が行われている。胎土中に黒色の微砂粒を含む。底面をのぞき全体に赤彩が施されている。焼成は良好である。



第８図　第２号住居跡実測図



第9図　第２号住居跡出土土器実測器

７は口径11.7cm、器高4.7cmゆるやかに丸味のある底部は、肩部に張りを持ち、口縁は小さく括れ端部を外方へつまみ出している。器内は薄く作られ内外面は底部を残し赤彩が施されている。

８は口径12.8cm、器高4.7cm、扁平な底部から張りのある体部が立上がる。口縁部は括れ、端部はつまみ出され小さく外反する。胎土中には大粒の砂粒が含まれている。内面及び口縁部外面に赤彩が施されている。

９は口径12.2cm、器高4.9cm、深味のある丸い底部となる。短い口縁部との境は稜を作り出している。口縁はくびれ端部を小さく引き出し外反している。底部にはヘラケズリ痕を残し、内面は赤彩が施されている。

甕（10～12）

10は口径16cm、破片からの復元実測である。厚みのある器内は９ミリを測る。口縁部はゆるやかにくの字に外反し端部でさらに小さく開く。内外面はヨコナデ整形され、細かく精選された胎土中に径３ミリ程の砂粒を含む。焼成は良く色調は黄褐色を呈す。

11は10と同一個体の底部と思われる。径７cm、厚さ２cmを測る。内面はナデ付調整され、外面にはタテ方向のナデ、底面はヘラケズリによって整えられている。色調は黄褐色、焼成は良好。

12は口径14cm、底径5.5cm、器高17cmで、最大径は胴部中央にあり、径15.5cmを測る。口縁はくの

字に外反し、胴部はタテ方向の整形が行われ全面に煤が付着している。内面には口縁部と体部の接合部あたりに輪積痕が残る。

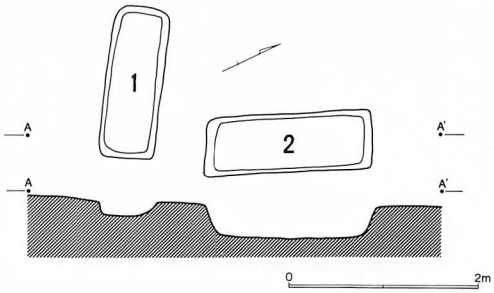
13は口径16.3cm、底部6.5cm、器高31.5cmを測る。長胴の甕で口縁はくの字状に外反し、端部はさらに開き薄く仕上げている。胴部上半はタテ方向、下半は横の整形が行われている。平底の底部は若干あげ底で、最大径は胴中央部で22cmとなる。胎土中に1～3ミリ程の砂粒を含む。焼成は良好。色調は明褐色を示す。

土壙（第10図）

土壙は3基検出された。1、2号は接近し、また3号は第1号周溝墓を切っている。平面プランは長方形で出土遺物はない。土壙中に堆積する土層はロームの粒子を混入する茶褐色土である。

各土壙の規模は以下のとおりである。

	長さ	幅	深さ	主軸方位
1号	180cm	60cm	15cm	N－23°－E
2号	160cm	60cm	15cm	N－58°－W
3号	100cm	52cm	30cm	N－32°－W



第10図　土壙実測図

その他の遺物（第11図）

調査中遺構外から出土したものである。

1は大甕の頸部破片である。頸部の推定復元径は30cmで、接合部には断面三角の補強凸帯をめぐらす。内面にも粘土を重ねナデ付けて厚味を増して補強している。体部外面は同心円の叩き目が施されている。色調は灰褐色で焼成は良い。

2は肩部の破片である。内面には頸部の折り返し部分を厚く丸味をもたせ、口縁が立上がるものと思われ、断面の形状から補強の凸帯は施されていないものと思われる。

外面にはタテの平行叩き目の上からカキ目調整が行われ、内面には同心円の叩き目が残る。

3は底部付近の破片で2と同一個体と思われる。

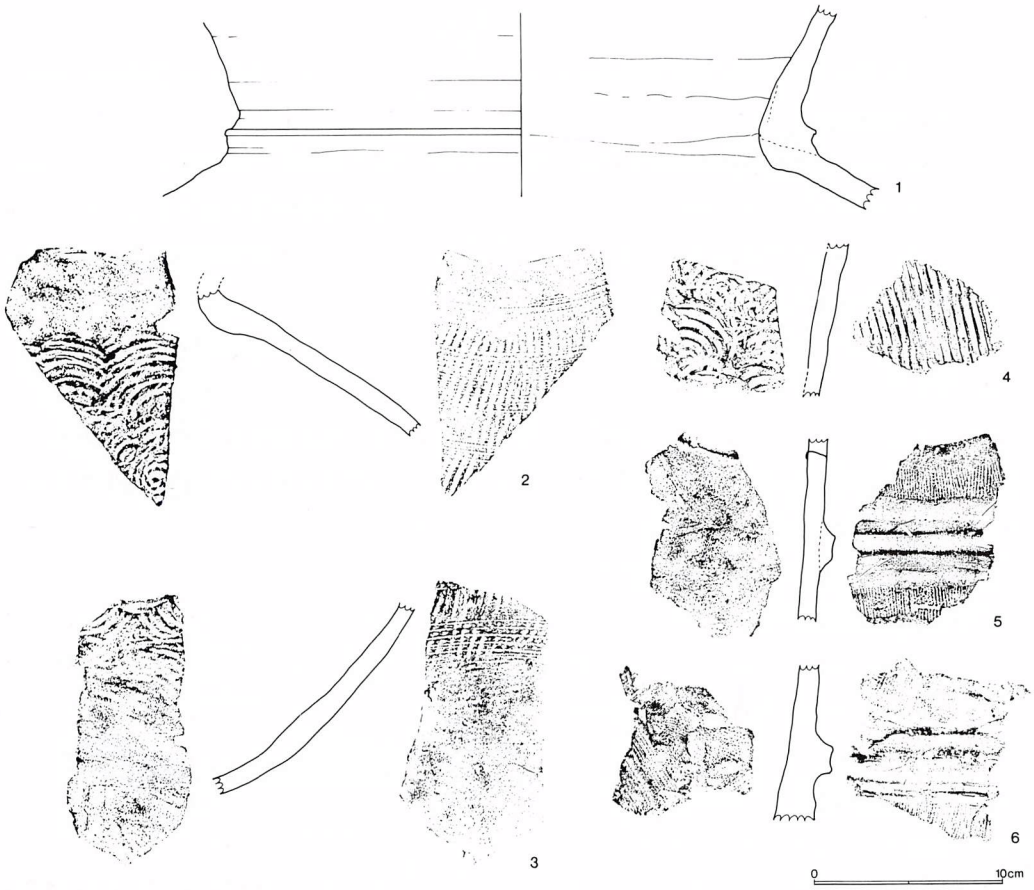
叩き目の上からカキ目調整が行われ、内面には同心円の叩き目がみられる。胎土は精選され焼成は良い。

4は体部の破片である。器面はタテ方向の平行叩き目が行われ、内面には同円心の叩き目を行っている。色調は瓦器質に焼成はされているため茶褐色を呈している。

埴輪（5．6）

5は外面はタテの細かいハケ調整で円形のスカシがある。タガは断面扁平な台形となる。内面は丁寧なナデ付けが行われ、胎土は細かく、焼きしまっている。

6は厚味のあるつくりでタガは断面台形となる。外面はタテのハケ調整で、内面にも細かいハケ調整が行われている。タガの下部は厚いつくりとなっている。胎土、焼成は良好である。



第11図　その他の出土遺物

ま と め

陣場遺跡の調査は、本報告を含めこれまでに３回行われている。第1回は昭和33年に早稲田大学考古学研究室の滝口宏・玉口時雄による学術調査で溝が検出されている[註6]。第２回目は今回報告するところの本調査である。第３回目は昭和56年に行田市教育委員会により個人住宅の建設に伴う調査が行われた。

これらの調査の中で、第1回と第３回は明確な遺構が検出されず、まとまった遺構が検出されたのは今回報告の第２回調査であった。

調査の結果、検出された遺構は方形周溝墓２基、古墳時代住居跡１軒、歴史時代住居跡１軒、時期不詳の土壙３基である。遺構に伴う土器の他、縄文土器や埴輪片・中近世陶器の破片も採取されており、陣場遺跡は古くから各時代にわたって、人々の生活が営まれていたのである。

旧石器時代の資料は現在のところ確認されていないが、縄文時代前期までは遡ることができる[註8]。

今回の調査では、縄文後期～晩期の土器片が出土しているが、これらの資料報告は別稿を予定しているので、今回は割愛した。

それでは、各時代を追って問題点を整理してみたい。

方形周溝墓

方形周溝墓は２基検出されたが、両者とも半壊の状態であり、築造当初の規模は不明である。このうち２号周溝墓の溝内から土器２点が出土している。

さきたま周辺における方形周溝墓の発見例は少なく、鴻池遺跡で３基、武良内遺跡で１基、高畑遺跡で１基の調査例が知られている[註9]。これらの例をみると鴻池１号墳では南側の一辺が切れ、幅広の陸橋を有し、周溝の堀込みも浅くローム面からわずか40～48cm程である。盛土の高さは推定32cmと極めて低いものである。また、隅丸方形を呈し、コーナー部分の深さは一様で変化なく、浅くなったり、四隅が切れるなど、ブリッチの微候施設は認められない。ブリッチを有する場合は、四辺のうち南側の一辺が切れ陸橋を形成するタイプの周溝墓となる。

この点陣場遺跡の周溝墓は、全形を知りえたわけではないが、コーナーの掘り込みが浅くなり、ブリッチとの違いがみられる。出現期における方形周溝墓の特徴である四隅が切れ、ブリッチを有する形態が、退化的に残存し、わずかに痕跡をとどめている。

また、１号墓出土の土器は器台、及び手づくね様の小型壷のみで、武良内遺跡などを比べて量的には極めて少ないものである。器台・小形壺とも周溝底から浮いて出土しているが、副葬品としてよりは、その性格から周溝墓上における葬送儀礼に使用されたものが、溝に転落したものと見るべきであろう。

この土器は、類例に乏しいが、あえて類例を求めるならば、諏訪山29号墳出土の器台に類似している[註10]。

諏訪山29号墳の器台は皿部と脚部接合部中央が中空となって貫通する、一般的な形の器台であるが、皿部は浅く、口縁部がつまみ出されたように折返した様に立上るなど、陣場遺跡の器台と共通する特徴を備えている。また、この器台とともに駿東地方の大廓式土器が伴出している[註11]。大廓式土器は遠江地方の発生期の古墳とされる新豊院Ｄ２号墳からも出土しており、年代決定の指標となる土器である。

諏訪山29号墳の土器組成を検討し、布留式土器と対応すると、布留式土器の中相の古いものに対応すると考えられ、五領式土器の範ちゅうでも古式に属するもので、おおむね４世紀中葉前後の年代が与えられる[註12]。

２号周溝墓からは遺物の出土がなく築造時期の決め手を欠くが、１号墓と同一主軸線状に並び、一定の規則性をもって構築されているので、ほぼ同時期に構築されたものとみてよいだろう。土器の年代から武良内遺跡の周溝墓に先行するものである。

周溝墓は、墓域として単独で形成されている。これに伴う同時期の集落遺跡は、現在のところ確認されていないが、いずれにしても集落は、差程遠く離れていない地域に存在すると思われる。

埼玉古墳群形成以前の４世紀の段階に、階層的な墳墓である周溝墓が造営されている事実は、その後の地域社会の発展の基盤要素として、埼玉古墳群の成立を考える上で、重要な意味を持つ周溝墓である。

古墳時代

古墳時代の遺構は鬼高期の住居跡が１軒検出され、土師器が良好なセットとしてまとまって出土している。中でも杯類は各々特徴があり、これについていくつかのタイプに分類し観察してみたい。

まず浅い丸底から大きな口縁が立上り、そして扁平な体部で内湾気味の口縁を有する１をＩＡ類とし、やや外反気味に開く口縁となる２をＩＢ類とする。

Ⅱ類は3で、口径が16.5cmと大形で一度くびれた短い口縁が外反気味に立上る。

Ⅲ類は４と５で、口縁部の形態に差異がみられるため、さらに細分し、丸味のある体部に外反した短い口縁が直接的に開く４をⅢＡ類とし、単純につまみ出された短い口縁が直立した５をⅢＢ類とする。

Ⅳは７～９で口縁部の作りが特徴的な土器である。口縁が一度括れるため体部との境が突出気味で、端部は小さくつまみ出され、大きな角度で外反するため、断面形はＳ字形を呈す。細かく観察すると個体間に微妙な作りの相違を確認できるが、基本的な製作手法は同じである。

以上４分類したが、この４タイプの土器群には共通した特徴を見い出すことができる。それはいずれの土器も、内外面とも赤彩を施し、またヘラケズリやナデ付の痕を整えて、器面を滑らかにしている。胎土中には砂粒を含んでいるが入念な仕上げのため、それほど手ざわりはザラついておらず、高品質な成品として仕上がっている。

赤彩を施す範囲は４を除いて内面は全面に行われている。ただし４の赤彩が行われていない部分は黒色処理が施されているため、全体的には表面はなめらかで、さらにヘラ磨きの効果で一段と艶を増している。

胎土には大粒の砂粒や石英質の砂を含むなど、みな良く似た胎土をしている。２と４はやや器肉が厚く、重量感がある。

器形の上からはⅣ類とした土器は比企形杯と呼ばれるもので、入間・比企地方を中心に分布する土器である。西は多摩地方、東は広く大宮台地南部から荒川以南一帯の遺跡から出土例がある。大宮台地の南部では良く知られた土器があるが、北に行くにしたがって分布の密度は薄くなる。

これまでのところさきたまでは古墳群からも、同期の集落遺跡からの出土も知られていない。

埼玉地域には、胎土が精選されきめ細かい器肌で、明るい肌色に近い灰褐色をした焼成の良い土器が狭小な範囲に分布する、極めて地域色の強い土器が存在するが[註13]、この埼玉型の在地の土器や、他地域の土器と混在せず、比企型杯を主体として使用されていた状況に陣場遺跡の特異性が示されている

このような土器の出土のあり方を埼玉古墳群の造墓に比企・入間地方の労働力を集中した結果とする見解がある。そこでまずこれら土器群の年代を探ってみると、伴出した甕形土器は、わずかに長胴化のきざしがみられるが、それほど進んでいない。10、11の壷も底部が厚く、口縁はくの字に外反してしっかりとした作りをみせている。

また比企型の杯は口縁が強く外反し、深味のある球形の体部など古い様相を備え、その年代は６

世紀の前半に比定されるものである[註14]。

5世紀の末、稲荷山古墳にはじまる埼玉古墳群の形成は、この地に突然大型古墳群を出現し、その後約百年間にわたり造墓活動を展開する。6世紀の前半は稲荷山古墳からちょうど2世代を経過したくらいの時代であろう。この段階で在地首長を組み込んだ埼玉政権は、北武蔵に安定した政治基盤を確立する。

荒川を挟んだ対岸の比企丘陵に位置する野本将軍塚古墳は6世紀の初頭に築造され[註15]、以後これを次ぐ大古墳の築造は行われなくなり、比企・入間の地域は完全に埼玉政権下に掌握される。この期を画期として埼玉へ比企・入間地方から人の動き・物の動きが活発となった現象として比企型土器の流入を捉えることができる。地域圏を超えた交流は、多分に深い政治的意味合いの伴う現象であり、社会の動向を敏感に反映したものである。

この物資の流入と一体となっている人の動きとは、造墓活動の労働力にとどまらず[註16]、安定した政権の存続・発展を維持するため、生産活動の基盤である稲作農耕の振興や新たな農耕地確保のための開発を進めなければならず、その目的遂行のためには多くの人的資源が必要である。

それらの作業に従事するための要員をして、比企・入間地方からの集団の移住が考えられ、陣場集落の人びとは開拓の大きな原動力となったのではなかろうか。

大古墳の築造にみるごとく、古墳時代には土木技術の進歩により、大規模な灌漑工事なども進められ、埼玉地方は広大な面積と肥沃な氾濫原は生産力ある良田として生産的な面から埼玉政権を支えた強力なバックホーンとなったのである。

歴史時代

平安時代の住居跡1軒が検出された。住居跡から出土した器の中で、杯はすべて須恵器である。須恵器杯の底部切離し技法は回転糸切りの無調整であり、また高台が付くものは出土していない。

口径に対する底部の比較は、口径<底径×2となるものが大部分であるが、8のみがやや小さな底径である。口縁部は、玉縁を呈するものや、小形で皿状の薄く扁平な杯もみあたらない。

こうした土器類の特徴は9世紀初頭に位置ずけられる。

胎土中には白色針状物質が含まれていることが確認された。この物質はウニの針といわれ、南比企窯跡群で生産された製品の中に含まれている特徴的な成分で、産地の同定に非常に有効的な鑑別方法である。

蓋1の口縁部には、すでにかえりは失われている。土師器甕類10の口縁部は、すでにコの字状の形態を呈しているのがうかがえるが、小形の台付甕では単純に外反する口縁となるなど、8世紀後半から9世紀にかけての特徴を備えている。この時期の遺跡は、古墳群の東方にある小針遺跡付近から古墳群周辺の旧盛徳寺や陣場にかけて、広い地域に分布し、急激な遺跡の増加をみせている。

このような現象と時を同じくして、旧盛徳寺が創建されており[註17]、その存在と無関係では有り得ないだろう。

こうした遺跡から土出した須恵器の中には末野窯にも認められ、同一の集落・住居内から比企産と末野産が混在する事実もある[註18]。

律令体制の中に再編された集落間に、各地で生産された須恵器が流入している。日常の什器としての須恵器を媒介とした商品経済の発達は、民衆の自立化をうながし、生産地の拡大と消費の増大が進む。この様な社会的要求の高まりが丘陵地帯に大きな窯跡群が築く原動力となったのである。

この他の採取資料についてもふれておく。

表採品の中に須恵器の大甕と埴輪がある。大甕は、頭部に断面三角形の補強凸帯を有する特徴的な甕で、埼玉古墳群中からは中の山古墳周溝からの出土が知られている[註19]。

生産地は群馬県にあり[註20]、利根川流域の古墳には出土することが判っている。上流では児玉郡神川町[註21]、群馬県富岡市[註22]、にまで及んでいる。

大甕の多くは、古墳から出土しており、墓前祭祀の供献土器としての使用されたものが、破砕されたものであろう。大甕の性格から、陣場遺跡の甕も古墳に伴ったものと思われる。同時に埴輪も採取されていることから、この可能性が強い。凸帯を有する大甕の生産は6世紀後半とされており、この時期の所産とみてよかろう。また埴輪のタガがしっかりし、厚味のある埴輪でこれに伴うものと思われる。

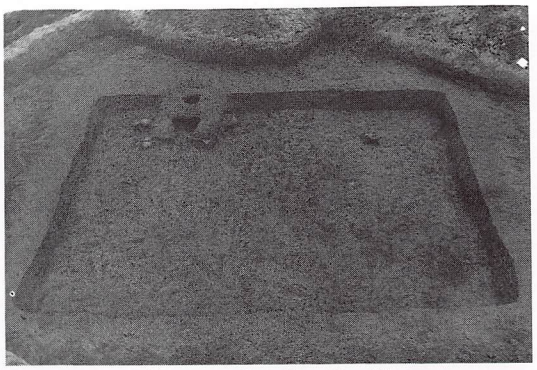
以上陣場遺跡の調査をとおして、遺跡の持つ重要性を認識することができた。さきたま古墳群とも強く関わりのある遺跡であることが証明された。さきたま古墳群のさまざまな問題点を解決するためにも周辺遺跡の調査は不可欠であり、その意味でも陣場遺跡の調査は意義が深いと言えるのではなかろうか。

註1　田中宏明　「緑泥片岩を運んだ道」土曜考古第14号　1989
註2　栗原文藏ほか　「小針遺跡の調査A地区」行田市文化財調査報告書第3号　1978
註3　塩野　博『埼玉県行田市長野神明遺跡について」　考古学雑誌第55号巻4号　1970
註4　栗原文藏　『行田市陣場遺跡』埼玉考古第7号　埼玉考古学会　1969
註5　高木豊三　『史蹟埼玉』埼玉村教育委員会　S1936
註6　栗原文藏　『古代の行田』行田市郷土文化会　1963
註7　『陣場遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査報告第2集　埼玉県教育委員会
註8　註6に同じ
註9　栗原文藏他　『鴻池、武良内、高畑』埼玉県遺跡発掘調査報告第11号　埼玉県教育委員会　1977
註10　『埼玉県古代古墳調査報告書』埼玉県史編さん室　1986
註11　柴田　稔　『新豊院山墳墓D地点調査報告書』磐田市教育委員会　1982
註12　坂本和俊　註10に同じ
註13　斎藤国夫　『小針遺跡発掘調査報告書B地区』行田市教育委員会　1984
註14　水口由紀子　『いわゆる比企杯の再検討』東京考古第7号　1989
註15　金井塚良一『比企地方の前方後円墳ー北武蔵の前方後円墳の研究(1)』研究紀要第1号
註16　註1に同じ
註17　栗原文藏『旧盛徳寺址の発掘調査』行田市文化財調査報告書第2集　行田市教育委員会　1975
註18　斎藤国夫　『小針遺跡第3次調査報告書』行田市遺跡調査会　1989
註19　埼玉県教育委員会『奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』　埼玉県古墳発掘調査報告第7集　1989
註20　酒井清治「房総における須恵器生産の予察」史館
註21　埼玉県遺跡調査報告第19集『青柳古墳発掘調査報告書』　埼玉県遺跡調査会　1973
註22　『富岡5号墳』群馬県立博物館　1972

陣 場 遺 跡 全 景

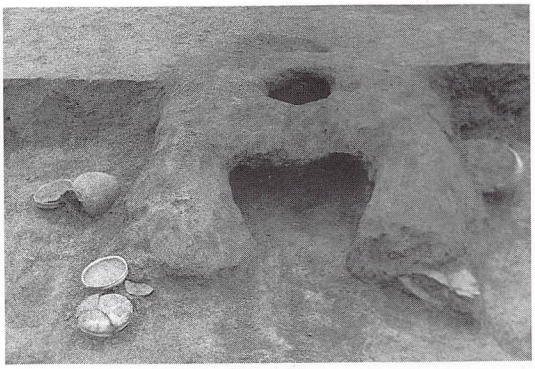
1 ・ 2 号 周 溝 墓

第 1 号 住 居 跡



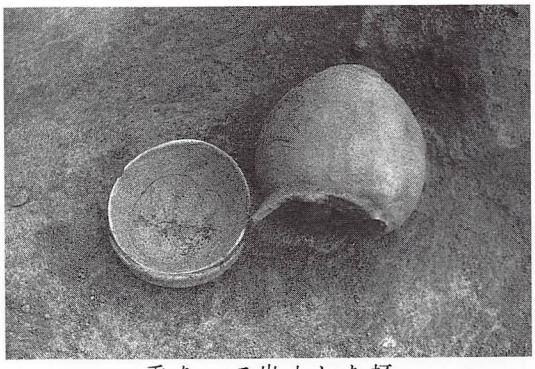
第 2 号 住 居 跡

2号住居跡土器出土状態



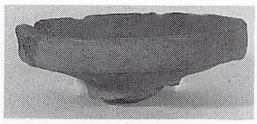
第 2 号住居跡カマド

カマド周辺の土器出土状況

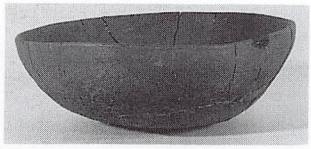


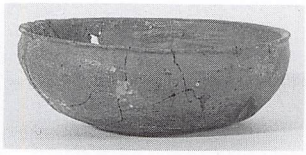
重なって出土した杯

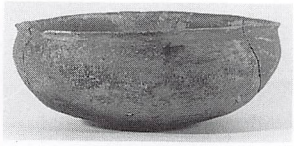
1 号周溝墓

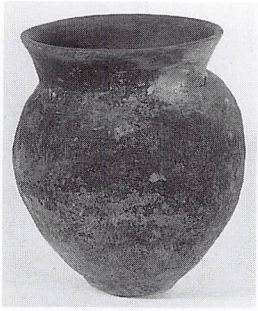


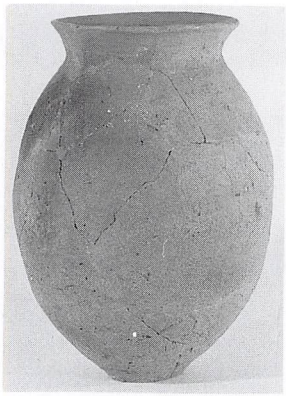
2 号住居跡

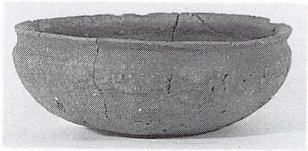


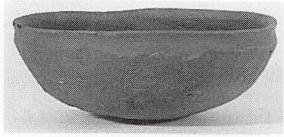
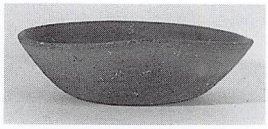
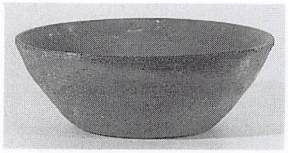
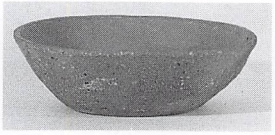
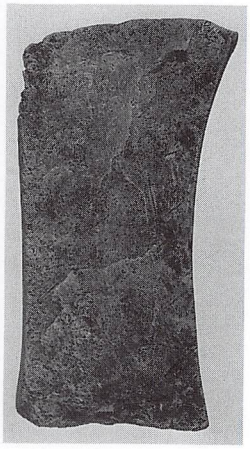












1 号住居跡